

西洋服飾の史的現象によるジェンダー論  
Gender Studies in the Historic Phenomenon of Western Costume

伊藤 亜紀<sup>\*1+</sup>, 水野 千依<sup>\*2+</sup>, 新實 五穂<sup>\*3+</sup>  
Aki Ito<sup>\*1</sup>, Chiyori Mizuno<sup>\*2</sup> and Iho Niimi<sup>\*3</sup>

\*1 国際基督教大学教養学部 東京都三鷹市大沢 3-10-2  
College of Liberal Arts, International Christian University,  
3-10-2, Osawa Mitaka-shi, Tokyo, Japan

\*2 京都造形大学芸術人文学部

Department of Art, Kyoto University of Art and Design

\*3 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科  
Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

+ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学  
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,  
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

**Abstract** : This primary objective of this joint research was to consider the concept of Gender reflected in the European costume during the 14<sup>th</sup>-19<sup>th</sup> century. Various aspects of the European clothing culture have explored. For instance, the theory of color symbolism during the 15<sup>th</sup>-16<sup>th</sup> Century in Italy, the representation of Italian Christian figures, and the cross-dressing in the Modern French literature have examined in the present research.

研究統括者・伊藤はシシルの『色彩の紋章』(Le Blason des Couleurs) (初版 1495 年)の邦訳を完了した[1]。本書は二部構成をとり、第 I 部では、金(or)、銀(argent)、朱(vermeil)、青(azur)、黒(noir)、緑(verd)、赤紫(pourpre)という、紋章を構成する 7 つの基本色のシンボリズムが論じられる。いっぽう第 II 部では、先の基本色に加え、黄褐色(fauve)やねずみ色(gris)といった中間色もとりあげられ、それらの色を組み合わせた場合の意味や各々の色の着こなし方が詳細に説明されている。従来より紋章学や服飾史、ヨーロッパ文化史の分野で注目を集めてきた書ではあるが、今回の邦訳で 16 世紀イタリアの美術理論や色彩理論にも影響を与えたことが明らかとなった。

また伊藤は 2008 年 12 月 17 日から 25 日まで銀座の和光並木ホールで開催された「レースの中の動物達——アンティークレースの世界」を監修した。本展示会は、16-20 世紀につくられた動物モチーフのあるレース作品を展示し、イタリアやベルギーのレース女工のきわめて水準の高い技術を紹介したもので、一週間という短い会期にも関わらず、多数の観客を集めた。

現在は 15 世紀フランス宮廷で活躍したフェミニスト詩人クリスティーヌ・ド・ピザンの事跡を論じた Maria Giuseppina Muzzarelli, *Un'italiana alla corte di Francia. Christine de Pizan, intellettuale e donna*, Mulino, 2007 の翻訳に専念しており、次年度にかけてこの作業は続く予定である。

研究分担者・水野は、本年度は、中世末からルネサンス期における異性装を示すキリスト教聖像に

---

\*1) itoa@icu.ac.jp

着目し、その図像の生成と受容を歴史人類学的に考察することを目的とした。

主に対象としたのは、ルッカの《ヴォルト・サント(ニコデムスの手になると考えられた磔刑像)》から派生する有髭聖女キュムメルニス(別称ウィルゲフォルティス、リベラータ、オントコマー)像と、北イタリア、スイス、ドイツ、イギリスなどに普及した「主日のキリスト」という図像から派生した両性具有像など、従来、ほとんど研究されてこなかった稀有な図像である。各事例に関連する図像データ、伝承や逸話を収集するとともに、像のジェンダーの反転がいかなる意味作用を担っているのかを、個々の歴史的・文化的文脈に照らしつつ考察を進めた。

とくに問題としたのは、この種の図像の生成である。キリスト教文化においては、新しい図像はしばしば既存の(ときに異教の)図像をベースに、その力を増幅させる形で形成されるが、上記の図像の成立と伝統的な図像とのかかわりはより複雑な様相を示していることが明らかとなった。なかでも着目したのは、新たな像のアイデンティティの曖昧さである。たとえば、「主日のキリスト」は、それ自体「キリストの受難具(アルマ・クリスティ)」という伝統的図像をパロディ化したもので、受難具の代わりに主日に禁じられた労働の道具に取り囲まれ、ときにそれで傷つけられているキリストを描いた異色の図像であるが、それをさらに両性具有化した像は、キリストとはほとんど同定しがたい解釈不可能なイメージである。しかも、聖堂内でもっとも神聖な内陣に描かれる例があるため、一層、その解釈は困難である。この種の解釈不可能な図像を解釈するにあたっては、今後、現地での図像のさらなる調査、同時代の文字・図像資料の分析に加え、イメージ人類学的研究の所産も参照したい。とくに、近年、19世紀初頭のアリゾナやニュー・メキシコにおいて生み出された両義的なキマイラの偶像(キリスト教的図像と先住民のシャーマニズム的図像の混淆)に着目し、イメージの記憶について論じたカルロ・セヴェーリの研究事例などとも比較考証する予定である。また、本年度はスイスのフリブール大学より美術史家ヴィクトル・I・ストイキツァ教授を招聘し、2月28日日本橋公会堂にて講演会「集中そして／あるいは蒸発——肖像・自画像・〈近代生活〉(Centralisation et / ou Vaporisation. Portraits, autoportraits et “la vie moderne”)」を開催した。100名を超える来場者を迎え、活発な議論が交わされた。

研究分担者・新實は、女性の異性装に関する研究がどのように行われてきたのかという書誌学的な調査をさらに進め、この調査結果を日仏女性研究学会の学会誌『女性空間』に投稿した。それにより、女性が異性装を行う理由は、物理的および経済的な文脈の中で、あるいは戦争や革命などの特殊な状況下でのみ語られる傾向があるため、女性の異性装をより精神的な側面に重きを置き、日常生活の枠組みの中で捉え直す必要性を理解した。また異性装が法律でたびたび禁じられていたこともあり、警察・裁判記録を資料とする研究が多く、その場合、異性装を行った動機や理由は社会的に受け入れられ、共感を呼び、自身を正当化できるものになりやすいという問題点も理解した。したがって、分担者は異性装という行為についての意識分析に文学作品の分析が実によく有効であることに加え、当時の人々の感性を探るためには、文学作品の分析が欠かすことができないものであることを再認識した。

ゆえに、“男装の麗人”として知られる女性作家ジョルジュ・サンドによって著された『ガブリエル』・『アンディヤナ』・『モープラ』・『レリヤ』など、1830年代の彼女の小説における服飾描写の分析を進展させるとともに、どのような作中人物が異性装を行うのか、女性の異性装の描写がいかなる文脈の中で現れ、どのような役割や効果を担っているのかを各作品について具体的に検討した。とりわけ『ガブリエル』、およびそれを戯曲にした『ジュリア』に関しては、物語が構想された背景に加え、異性装を行う女主人公像を探求し、そのイメージを明確にした。またゴーチェの『モーパン嬢』やバルザックの『ベアトリックス』など、当時の男性作家による作品も検討し、各作家にとって異性装が何を表象していたのかを明らかにした。

## 文献

1. シシル『色彩の紋章』伊藤亜紀・徳井淑子訳、悠書館、2009年4月刊行予定